

退職のご挨拶



生物資源科学科 植物栄養・肥科学分野
関本 均

まだ若かりし30代はじめ、私は民間企業で肥料・農薬の開発研究に携わっていました。その後、縁あって宇都宮大学農学部で教鞭を執ることになりました。当時はかなり珍しいキャリアでした。民間から国家公務員（文部教官）に。企業における研究は、営業から上がってくる課題対応もあり、どうしても単発の研究課題になりがちです。主任の先生から薫陶を受け、一つのテーマにじっくり取り組み、大きく育てていくという経験はありませんでした。そのため、大した研究業績が残せなかったことが残念です。

絵画みたいな論文を書いてみたい。ずっとそう思っています。「しっかりとしたモチーフ（背景・目的）、巧みな時間・空間の切り取りと構図（方法）、効果的な光と色、表現者の思いを伝える人物や風景の表情（データと考察）、そして、みる人を魅了して後世に残る」。そんな論文を書きたいと思っていました。しかしながら、思い通りにはいきませんでした。

化学肥料の登場で、食料生産性と労働生産性（コスパとタイパ）が爆発的に上がりましたが、安易に使用されて環境問題や社会的格差を招きました。その反省として、有機農業などのコスパやタイパが決してよくない農業生産が見直されています。しかし、コスパとタイパがよい生産システムを捨てることもできません。有機物の利用を十分に図りながら、化学肥料を賢く使うことがベターでしょう。ヒトにはそれぞれに「生のリズム」があって、過度にコスパとタイパを求めて走り続けることは、それを崩して疲弊します。テキトーがいいんです。そして「不便益」を知ることが大切です。農学は「余白（ゆとり）のチカラ」も身につく学問です。こんなことを肥料学の授業で話していました。

学生・教職員・卒業生の皆さまに支えられて30年。衣・食・住に関わる生物生産の総合科学「農学」とともに過ごせて幸せでした。ありがとうございました。

退職のご挨拶



附属演習林 演習林研究室
飯塚 和也（昭58林卒）

平成14年（2002年）に母校である本学に着任以来、22年間お世話になり定年を迎えることになりました。2001年以前の19年間は林野庁と林木育種センター、その間、JICAの派遣職員として、ラテンアメリカのパルー、チリ、ウルグアイで計2年半の間勤務しました。国内では、東京、北海道、茨城で勤務して、その間、稚内から西表島まで出張しました。宇大に赴任後2011年に発生した東日本大震災以前に、学生たちと2度タイに行く機会に恵まれました。大震災以降は、多くの方々の御指導・アドバイスを受けながら、放射線・放射能に関する業務に従事し、多くの研究者とともに福島で調査する機会もありました。

宇大に着任した当初は、フモトミズナラと少花粉スギ品種の関する研究に挑戦し、両樹種の試験地を数カ所設定することができました。特に、少花粉スギ品種に関しては栃木県と共同研究を行い、成長、材質等のテーマで7名の学生が卒論研究に取組みました。成長初期段階ですが材質調査を行うまでに、植栽後10年の歳月が経過しました。しかしながら、自分で設定・植栽した試験地のスギを家系ごとに伐採し、基礎的材質調査が実施できたことは、演習林教員冥利に尽きます。

本学は、全国でも数少ない直営生産（職員が樹木を伐採・造材・販売）を行っている演習林です。人工林のスギとヒノキの素材生産を実施していますが、自分が林野庁時代、最初の現場が北海道の占冠村の製品事業所（樹木の伐採・販売）であり、樹高20m以上の立木の伐採現場は、お気に入りの空間でした。

最後になりますが、多くの人々にお世話になりながら、ここまで来ました。最終講義のとき、自分は学生や演習林職員らに支えられ大学生活を過ごしていたことを痛感し、幸せに浸りました。この紙面をお借りしまして、皆様からお礼申し上げます。宇都宮大学の益々の発展を祈念して退職の挨拶といたします。本当に有難うございました。

退職のご挨拶



森林科学科 森林生態学・育林学研究室
大久保達弘 (昭57林卒)

宇都宮大学を退職するにあたって、関係者の皆さまに心からの謝意を表したいと思ひます。大学、研究生として5年間(1,826日)、教員として38年11ヶ月(14,200日)計42年11ヶ月(16,026日)を宇都宮大学、特に農学部林学科と森林科学科で無事に過ごすことができました。俳人松尾芭蕉は“百代(はくたい)の過客(かかく)”(永遠の旅人)という名言を残しています。森林の時間は長く人の一生の数倍、人は森林の変化(遷移)のほんの一断面を見ているに過ぎません。森林の教育研究の旅はまさにこの言葉に尽きます。

大学院生の時(25歳)に設置した秩父山地のイヌブナ林の永久生態調査区は今年40年を迎えました。長い観察期間でシカ食害とズズタケの一斉開花によるブナ林の林床植生の変化に遭遇することができたのは、学生、同僚や研究仲間と一緒に同じものを観つづけ現場で議論したからだと思ひます。“Study Nature Not Books”の精神は重要だと感じました。30歳代(1990年代)前半からマレーシア・サラワク州の熱帯雨林の長期動態研究に参加しましたが、この時期は国連環境会議(1992年)が開かれ森林が地球環境問題に直結する事が広く知られた時期でした。そこでの経験がその後のタイや中国南部の森林での生態系修復研究にもつながりました。50歳頃、名古屋で開かれた国連生物多様性条約締約国会議(CBD-COP10)(2010年)に向けた那珂川流域の里山評価が始まり、那須烏山市大木須で農学部附属里山科学センターのプログラムに参加しました。この頃から、森林の生態研究は、人との関わりを排除してはいけないとの考えに変わりました。2011年に東日本大震災とそれに続く原子力災害が、栃木県の里山にも深刻な影響を与え、これ以降定年までの間、腐葉土原料の落葉、しいたけ原木栽培用のナラ類の樹体を中心に放射能環境モニタリングを続けてきました。

最後の約7~8年で特に印象に残ったことは恩返しの気持ちでお手伝いを始めた宇大生の海外送り出し支援でした。自身が初めての海外調査で英語コミュニケーションに苦勞しながら鍛えられたマレーシア・サラワク州で、海外初体験の宇大生に英語環境、多文化共生を是非体験してほしいとの思いがありサラワク大学で全学海外英語研修として実施していただいています。4月より芭蕉の立寄った山形県新庄市の新設大学(東北農林専門職大学)で新たな教育研究をスタートさせました。今後とも宇大農学部を少しでも後方から応援できればと思ひています。大変お世話になり誠にありがとうございました。

新任教員のご挨拶



おがわ まさゆき
小川 真如

所属・職種：農学部 農業経済学科
助教
専門：農業経済学

2023年11月に農学部農業経済学科に助教として着任いたしました小川真如と申します。

島根県益田市で生まれ育ち、地元の高校を卒業後、東京農工大学に入学し、修士課程まで進学しました。その後、(公社)全国農業共済協会に勤務した後、早稲田大学大学院に進学し、博士号を取得しました。(一財)農政調査委員会での研究を経て、宇都宮大学助教として教育・研究に携わる機会をいただきました。

私の専門分野は、農業経済学です。学部生時代から、堆肥を用いた稲発酵粗飼料用稲の栽培など、資源循環型の食料生産システムについて、農業経営学や農政学の観点から分析を行ってきました。現在は、国内各地を調査対象とし、主に水田農業経営や、各種施策の効果・影響など調べながら、現場実態に基づいた政策提言などを行っています。また、日本の農学や農業経済学の特徴にも関心があり、とくに水田農業が学問に及ぼした影響についても研究を進めています。

教育面では、もともと、専門である農業経済学分野ではなく、広尾看護専門学校での医学・看護学論文の読み方を教えたり、東京女子大学で離散数学を教えたりしてキャリアをスタートしました。また、コーポレート・ファイナンスや、健康管理入門など、他分野の教育にも携わってきました。こうした経験を踏まえて、学生に幅広い視点からの解釈や情報提供などをしてきました。

着任してから半年ほどが経ち、宇都宮大学農学部の学生の素質の高さに驚かされる日々が続いています。教員が障害要因となって学生の成長の妨げとならないよう、多様な成長をサポートできる能力の維持・向上に向けて、日々邁進してまいります。

まだまだ未熟ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。